広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第57号　2008　199－207

Kはなぜ自殺したのか

―『こころ』の謎を解く―

柳　澤　浩　哉

（2008年10月２日受理）

Why Did K Commit Suicide?
―An investigation of the puzzle of “Kokoro”―

Hiroya Yanagisawa

Abstract: KOKORO has the questions on the all characters in the 3rd chapter. This paper choose two questions on the 3rd chapter: (1) Why did K commit suicide? (2) What did the last sentence mean, scribbled in K’s suicide note? In understanding of KOKORO the most important character is that Sensei who is the narrator of this novel is incomprehensible K’s mind, so the story told by Sensei is far from the truth. This paper’s answer is below: (1) K determined to abandon the pursuit of his “Michi” and to give priority for the love to Shizu. And K trusted Sensei should support his decision. But Sensei denied K’s decision instead to support. So his despair made him to commit suicide. (2) The last sentence is that “I should have killed myself early, but why I did not scuiside then?” K wrote this sentence to complain of Sensei and Shizu’s engagement. Because their engagement told K that Shize had loved Sensei. And K notify that his determination to abandon the pursuit his “Michi” was made by his illusion that Shizu had loved him.

Key words: Kokoro, K’s suicide, K’s suicide note
キーワード：『こころ』，Kの自殺，Kの遺書

1　『こころ』の謎

『こころ』の核は，先生の遺書をそのまま収録する形式で書かれた第三部「先生と遺書」である。『こころ』は高校の国語教科書に最も多く採録されている小説であるが，どの教科書も，第三部の後半を採録している。しかし，この第三部は実は非常に難解なのである。表面をなぞる筋を追うだけの読みでは気づきにくいが，丹念に読んでみると，登場する先生・K・静・奥さんの四人全てについて，それぞれの人物にとって一番肝腎な点が不明なのである。各人物の謎を列挙してみよう。

先生：なぜ明治の精神に殉死したのか。
　　Kに対する罪悪感はどこに行ってしまったのか。

K：なぜ自殺したのか。
　　遺書の最後にある「もっと早くに死ぬべきだったのに，なぜ今まで生きてきたのだろう。」は何を意味しているのか。

静と奥さん：なぜ先生をあんなに翻弄したのか。
　　先生を籠絡するための策略で動いていたのか。

四人しかいない登場人物の全員について，その一番肝腎なところが分からないというのは明らかに異常である。これは，『こころ』という作品の最も重要な特徴であると私は考えているが，この点については漱石の創作上の特徴と合わせて，別の機会に論じてみたい。

『こころ』には膨大な先行研究があるが，静と奥さんが策略で動いていたかという問題を除いては，ここにあげた謎に挑んだ研究は希である。だが，第三部に

書かれているのが先生とＫを主人公にした物語である以上，先生とＫの二人の自殺の理由が明らかにならない限り，『こころ』が分かったとは言えないはずである。そして，物語の流れを考えれば，四つの謎の中で一番重要なのはＫの自殺を巡る謎となるはずである。

本稿は，Ｋを巡る次の二つの謎を明らかにすることを課題とする。

１）Ｋが自殺をした原因は何か。

２）Ｋの遺書の最後にある「もっと早くに死ぬべきだったのに，なぜ今まで生きてきたのだろう。」の意味は何か。

本稿の方法は遺書の本文を精読するオーソドックスなものであるが，そこから明らかになる結論は，従来の先行研究とは全く違うものになるはずである。

Ｋの自殺の原因を考えたこれまでの研究は，遺書の最後の方にある，先生の次の言葉を重視しているようである。

> 私は仕舞にＫが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった結果，急に所決したのではなかろうかと疑がい出しました。（五十三）

確かに，この説明は一見それらしく見えるが，この説明にはある種の誤魔化しが隠れている。一般的に考えてみよう。自殺をする人間は多かれ少なかれ孤独である。つまり，ほとんどの自殺者について，「彼は孤独だったから自殺した。」という説明が当てはまってしまうのだ。つまり，この説明はどの自殺にもあてはまってしまう漠然としたもので，実質的には何も説明してはない。「彼は悩んでいたから自殺した。」という当たり前の説明と大差ないのである。もちろん，Ｋの孤独の特徴が具体化でき，さらに，それが自殺させる必然性を持っていたことまでを説明できれば事情は別である。逆に，「淋しくって仕方がなくなった」状態をそのレベルまで具体化できない限り，これは何も説明してはいないのである。

本稿ではＫが自殺した原因を特定していくが，その前に，二つの手続きを踏んでおきたい。その第一は，先生の裏切りが自殺の原因ではないことの確認。第二は，Ｋの自殺未遂の可能性の指摘である。

２　先生の裏切りが自殺の原因か

自殺の原因の可能性として，まずあがるのは先生の裏切りだろう。Ｋはどうにもならないほど静を好きになっていた。静への恋は，Ｋにとって何より大事な道の追求を妨げる程に強烈である。Ｋはその静を突然奪われてしまったのである。しかも，相手はＫが全幅の信頼を置き，静への恋を相談していた先生である。言うまでもなく，これはＫにとって全く予想外の出来事であった。

ならば，先生と静の婚約を突然聞かされた時，Ｋは激しい衝撃に襲われたはずである。先生への怒りと憎しみ，自分自身への憤りを感じただろうし，誰も信用できないという強い人間不信も感じたはずである。しかし，不思議なことに，裏切りの事実を知らされた瞬間，Ｋは全く動揺してないのである。その部分を引用してみよう。

> 『道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。貴方もよくないじゃありませんか，平生あんなに親しくしている間柄だのに，黙って知らん顔をしているのは』
>
> （中略）
>
> 奥さんの云うところを綜合して考えて見ると，Ｋはこの最後の打撃を，最も落ち付いた驚をもって迎えたらしいのです。Ｋは御嬢さんと私との間に結ばれた新らしい関係に就いて，最初はそうですかとただ一口云っただけだったそうです。然し，奥さんが，『あなたも喜こんで下さい』と述べた時，彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら，『御目出とう御座います』と云ったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に，また奥さんを振り返って，『結婚は何時ですか』と聞いたそうです。それから『何か御祝いを上げたいが，私は金がないから上げる事が出来ません』と云ったそうです。（四十七）

この瞬間のＫの心情を表現した「最も落ち付いた驚をもって迎えたらしい」はレトリックで撞着語法と呼ばれる技法である。これは，正反対の意味の語を結合させる技法で，謎めいた意味を感じさせて注目させると同時に，矛盾をはらんだ状況を一言で表現してしまえる技法でもある。ここでは撞着語法の後者の効果が効いている。だから，「最も落ち付いた驚をもって迎えたらしい」と表現されると，動揺を隠し通したことが，あたかも当然のように思えてしまうが，本当にそうだろうか。先生の裏切りは，Ｋに最大級の衝撃を与える事件である。Ｋがどれほど感情を抑制できたとしても，この動揺を隠し通せたとは思えない。激しい動揺は，どんなに隠そうとしても動作や言葉のどこかに現れてしまうものだからである。

この時，Ｋの様子を観察しているのが奥さんである

ことを忘れてはならない。奥さんは決して鈍い人ではない。その奥さんが,「妾が話したら変な顔をしていましたよ。」としか感じていないのだ。もちろん，奥さんもKの反応に納得していたわけではない。それは,『あなたも喜こんで下さい』と言っていることから分かる。ただし,奥さんが〈どうかしたのですか〉といった不審を尋ねる言葉を出していないことが重要である。この時，Kは無反応だったのである。あまりの無反応を不自然に思ったから『喜こんで下さい』と言ったのだろう。奥さんの言う「変な顔」とは，驚きや動揺の表情ではなく，ポカンとした，状況が飲み込めないような顔だったのではないか。もちろん，あまりの衝撃に正気を失って無表情になった，という可能性も考えられるが，それは奥さんとの遣り取りによって否定される。奥さんに促されたKは,「微笑を洩らしながら」常識的な大人の対応ができているのだから。

ここから何が分かるか。先生の裏切りはKにほとんど衝撃を与えていないという意外な事実が分かるのである。だとすれば，先生の裏切りが自殺の原因になる可能性はゼロである。

この事実をどのように考えればいいだろうか。これを合理的に説明できる仮説を考えてみよう。たとえば，Kが先生の既に裏切りを知っていたとすれば，驚かなくて当然である。しかし，この可能性はゼロである。ならば，この少し前に，先生の裏切りよりも遥かに大きな衝撃を経験していたとしたら。そして，その衝撃が自殺を試みさせるほど大きなものだったとしたらどうだろう。この場合なら,先生の裏切りを知った時に，どこかポカンとした表情と反応になったとしてもうなづける。巨大な衝撃は，それ以外のあらゆる衝撃からインパクトを奪ってしまうからである。実は，これがKの真相なのである。

3　Kの自殺未遂

遺書の中に一箇所，Kが自殺未遂をしたと読める場所がある。先生がKに対して「精神的に向上心のない者は馬鹿だ」という手厳しい批評をした日の夜のことである。その箇所を引用してみよう。

> 私は程なく穏やかな眠に落ちました。然し，突然私の名を呼ぶ声で眼を覚ましました。見ると，間の襖が二尺ばかり開いて，其所にKの黒い影が立っています。そうして彼の室には宵の通りまだ燈火が点いているのです。（中略）
>
> その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kは何時でも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向って，何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない，ただもう寝たか，まだ起きているかと思って，便所へ行った序に聞いて見ただけだと答えました。Kは洋燈の灯を脊中に受けているので，彼の顔色や眼つきは，全く私には分かりませんでした。けれども彼の声は不断よりも却って落ち付いていた位でした。（四十三）

一見，たわいのないやり取りのようにも見えるが，真夜中に先生の名を呼ぶのはただ事とは思えない。これにはいろいろな理由を想像できるが，一つの可能性として，Kは先生が眠っているのを確かめた上で自殺しようとしていた,ということが考えられる。すなわち,〈自殺未遂〉である。この場面を〈自殺未遂〉と考えるか否かは専門家の間でも意見が分かれているが，私はそう考えて間違いないと思う。自殺未遂と考える研究者の一人，石原千秋氏の説明を引用しよう。

> 次の日（筆者注：この翌朝),先生が何か話があったのかとKに聞くと,「そうではないと強い調子で」否定します。ところが，Kが自殺した晩に関しても「見ると，何時も立て切ってあるKと私の室との襖が，この間の晩と同じ位開いています」（下四十八）という記述があるのです。これらのことから考えると，先の上野から帰った晩に，もし先生がKの声に気づかずに眠っていたら，Kは自殺していたのではないかと考えるのが自然ではないでしょうか。
>
> それは言うまでもなく，先生がKを裏切ったことをKが知る以前のことです。そして，Kが実際に自殺したのも，先生の裏切りを知った日ではありませんでした。したがって，こういう結論になります。すなわち,Kの自殺の原因は失恋のためではないし，先生の裏切りを知ったためでもありません[1)]。

私もこの解釈に全面的に賛同である。夜中に二人の部屋を隔てる襖が開いていたのは，Kが自殺した晩とこの晩の二回だけである。石原氏はあげていないが，これを〈自殺未遂〉と考えるべきもう一つの根拠を，遺書から見つけることができる。この翌朝のKの問いがそれである。少し前から引用しよう。

> （筆者注：昨晩の行為について）何故そんな事をしたのかと尋ねると，別に判然した返事もしません。調子の抜けた頃になって，近頃は熟睡ができるのかと却って向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。（四十三）

Kがこの朝に限って「近頃は熟睡ができるのか」と唐突に聞いたのはなぜだろう。Kがこれまで先生の体調を気遣ったことは一度もないし，この時に先生の体調を気遣うべき特別な事情があったわけでもない。つまり，これは体調を気遣っての言葉ではない。先生が深夜に起きているか否かを確認するための問い，そう，夜中の何時なら自殺が可能なのかを考えるための問いなのである。

Kがこの晩自殺未遂をしたか否かは，『こころ』の読みとって非常に重要な問題である。この部分の解釈に揺れが出ないように，漱石は，隙間を空けた襖と翌朝の問いとの二つの手がかりを書き入れたのである。ここに限らず『こころ』では，重要な行為については，その意味の解釈に揺れがでないように二つの手がかりを必ず書き残している。

4　Kはなぜ自殺したのか

前述の〈自殺未遂〉の半日前，つまりその日の昼間，Kは先生から「精神的に向上心のない者は，馬鹿だ」という痛烈な批評を浴びせられ，激しい衝撃を受けている。この言葉と自殺との関係から考えてみよう。〈自殺未遂〉の原因をその日の出来事に求めることは安易に見えるかもしれないが，この時の動揺は並のものではない。ならば，この衝撃から検討するのが自然な順序となるだろう。その時のKの反応から確認してみよう。

> 『精神的に向上心のない者は，馬鹿だ』
> 私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして，その言葉がKの上にどう影響するかを見詰めていました。
> 『馬鹿だ』とやがてKが答えました。『俺は馬鹿だ』
> Kはぴたりと其処へ立ち留ったまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎょっとしました。（中略）私は彼の眼遣を参考にしたかったのですが，彼は最後まで私の顔を見ないのです。そうして，徐々と又歩き出しました。（四十一）

「精神的に向上心のない者は，馬鹿だ」という言葉を聞いてKは足を止めたのではない。体が動かなくなってしまったのである。「地面の上を見詰めて」いる目には，おそらく何も見えてはいないだろう。うつむいたまま「徐々と又歩き出し」た姿はまるで幽霊のようである。これは，ショックというレベルの反応ではない。先生の言葉によってKの何かが破壊されてしまったとしか思えない。Kはなぜこれほどの衝撃を受けたのだろう。その理由についてはこの言葉が出る直前に先生が遺書に詳しく書き残している。

> 私は丁度他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は，私の眼，私の心，私の身体，すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意して，Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというより寧ろ明け放しと評するのが適当な位に無用心でした。私は彼自身の手から，彼の保管している要塞の地図を受取って，彼の眼の前でゆっくりそれを眺める事が出来たも同じでした。
> Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は，ただ一打で彼を倒す事が出来るだろうという点にばかり眼を着けました。（四十一）

先生らしからぬ攻撃的な内容と書きぶりである。「他流試合」に始まって「要塞の地図」の比喩が現れ，最後は「ただ一打で彼を倒す事が出来るだろう」となるのだから尋常ではない。そして，Kに最大の打撃を与えるために選ばれたのが，「精神的に向上心のない者は，馬鹿だ」というあの言葉である。先生は言う。「これは二人で房州を旅行している際，Kが私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを，彼と同じような口調で，再び彼に投げ返したのです。」（四十二）半年ほど前の房州旅行の際，日蓮の話題や難しい話に付き合おうとしない先生に，Kは「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」と言い放って「さも軽薄もののように遣り込め」（三十）たことがある。先生はこの体験を利用し，この言葉をそのまま投げ返したのである。言うまでもなく，恋と信条との矛盾を教えるだけなら，こんな因縁のある言葉を持ち出す必要はない。Kを最大限侮辱し，いたたまれなくすることで，恋を諦めさせようとしたたくらみである。そして，結果は先生の期待を遥かに超えるものだった。

確かに，遺書の攻撃的な言葉で説明されると，Kのあの激しい衝撃も当然のように思えてしまう。もちろん，この言葉がKの痛いところを突き，さらに屈辱を与えたことは間違いないだろう。しかし，この言葉が，何かを破壊してしまうほどの力を持っていたとは，どうしても考えられないのである。なぜなら，静への恋が自らの信条に反していることは，誰よりもK自身がよく分かっていたはずだからである。自分の欠点をいくら攻撃されても，それが自分にも分かっている欠点だったら，自分が破壊されるほどの打撃にはならないだろう。そこに侮蔑的な言葉や口調が加わったとしても，それは変わらないと思う。もちろん，洗脳のように何度も執拗に繰り返されれば事情は別であるが，

先生は二回繰り返しただけである。Kのあまりの衝撃は明らかに不審である。

もっとも，衝撃の大きさは主観的にしか判断できないものだから，これを根拠に不審と断定するのは乱暴だという反論があるかもしれない。実は，私がKの衝撃を不審だと主張する根拠は，これ以外にもう一つある。それは動揺のタイミングである。Kは「精神的に向上心のない者は，馬鹿だ」と言われるより前，「退ぞこうと思えば退ぞけるのか」と言われた時に激しく苦しみ始める。それほど攻撃的とも思えないこの言葉に苦しみ始めたことは，衝撃の過剰さ以上に不審なことと考えるべきである。

「退ぞこうと思えば退ぞけるのか」という言葉が，どうしてKを苦しめたのか。これは『こころ』という作品において間違いなく最も重要なポイントである。これが解ければ,「精神的に向上心のない者は,馬鹿だ」という言葉がKを破壊した理由，そしてKの自殺の原因，さらに，いまひとつはっきりしないKの遺書の意味までがクリアーになる。そして，この謎はそれだけには留まらない。この謎には，『こころ』という作品の読みを根底から変えてしまう鍵が隠されているのだから。

もちろん，Kが衝撃を受けた本当の理由は遺書の中にはっきりと書き込まれている。ただ，それがあまりに間接的な形で書かれているために，これまで誰も気づかなかっただけである。

少し時間をさかのぼってみよう。静への恋を先生に突然告白した後，Kは自分の恋について一切話さなくなってしまう。「恋をどう取り扱う積りか」（三十九）と先生が直接尋ねてみても，Kはこの問題についての沈黙を続ける。しかし，学校が始まった「ある日」，唐突にKがこの問題について話しかけてくる。その時，先生は図書館で一心に論文を読んでいた。（傍線筆者）

> Kは低い声で勉強かと聞きました。私は一寸調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子で一所に散歩をしないかというのです。（中略）私は已を得ず読みかけた雑誌を伏せて，立ち上がろうとしました。Kは落付き払ってもう済んだのかと聞きます。私はどうでも可いのだと答えて，雑誌を返すと共に，Kと図書館を出ました。（中略）その時彼は例の事件について，突然向うから口を切りました。前後の様子を綜合して考えると，Kはそのために私をわざわざ散歩に引っ張出したらしいのです。（四十）

Kが図書館に来たのは先生に会うためだったようである。その上で，調べものを中断させて散歩に誘い出したのだから，Kは自分の恋について先生と話したくて仕方がなかったに違いない。ここでは，Kが「落着き払って」先生を気遣う余裕すらあった事に注意して欲しい（傍線部）。Kがあの激しい衝撃に襲われるのはこの散歩の途中である。散歩の中でKに一体何が起こったのだろう。この続きを引用してみよう。（傍線筆者）

> けれども彼の態度はまだ実際的の方向へ向ってちっとも進んでいませんでした。彼は私に向って，ただ漠然と，どう思うと云うのです。どう思うというのは，そうした恋愛の淵に陥いった彼を，どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。一言でいうと，彼は現在の自分について，私の批判を求めたい様なのです。其所に私は彼の平生と異なる点を確かに認める事が出来たと思いました。（中略）
>
> 私がKに向って，この際何んで私の批評が必要なのかと尋ねた時，彼は何時もにも似ない悄然とした口調で，自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと云いました。そうして迷っているから自分で自分が分らなくなってしまったので，私に公平な批評を求めるより外に仕方がないと云いました。私は隙かさず迷うという意味を聞き糺しました。彼は進んで可いか退ぞいて可いか，それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退ぞこうと思えば退ぞけるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉が其所で不意に行き詰りました。彼はただ苦しいと云っただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。（四十）

この引用部には腑に落ちない点が二つある。その一つ目は話の流れである。Kは自分の恋について先生と話をしたくて仕方なかったはずである。しかし，彼は自分の恋について一言「どう思う」と言っただけで，自分からは何も語っていない。先生の求めに応じて，ぽつぽつ話すだけである。Kは一体何を話したくて先生を誘い出したのか。確かに，何かに追い込まれた人間が，他人の言葉に救いを求めようとすることはあるが，Kの「落着き払っ」た態度は追い込まれた人間のものではない。

そして，二つ目が，先ほど書いた反応のタイミングである。引用の傍線部分を確認して欲しい。それまでの「落着き払って」いたはずのKが，この瞬間に突如苦しみ始める。「苦しい」と言葉に出しているのだから，この苦しみは先生の思い過ごしではない。Kがめったに感情を表に出さないことを考えれば，異常事態と

言っていいだろう。しかし，「退ぞこうと思えば退ぞけるのか」という言葉は，ここまでの遣り取りを中断させるものでも，方向転換させるものでもない。「一歩先へ出ました」と先生が言っているとおり，自然な流れで出てきた問いである。この問いが，どうしてそれほどの衝撃を与えたのか。そもそも，Kは先生と何を話そうとして散歩に連れ出したのだろう。

Kの言動は一見謎だらけのようにも見えるが，ある一つの仮説を立てることで全て説明できる。

まず，Kは何かを話したくて先生を誘い出したのではない。彼の言葉どおり，先生の「批評」がどうしても欲しかったのである。どうしてだろう。

他人に相談を持ちかける場合を一般的に考えてみよう。自分が苦しい状況に置かれていても，問題が全く整理できていない時は，案外，他人に相談を持ちかけたりしないものである。相談を持ちかけるのは，自分の中である程度問題が整理された時，あるいは，おおよその答えが出ている時である。Kも長い間考えて，自分の中でこの問題にようやく答えが出せたから先生に「相談」を持ちかけたのである。

Kは，先生から「迷うという意味を聞き糺」されると，迷わず「進んで可いか退ぞいて可いか，それに迷うのだ」と答えている。少なくとも，Kは自分の恋の問題をこの二者択一の形にまで整理した上で，先生の「批評」を求めてきたのである。いや，彼はさらにその先まで考えていた。先生がどちらの答えを選ぶかまで，Kには分かっていたのである。もしも，Kが〈進むか退くか〉を決められずに苦しんでいたなら，この二者択一を提示した段階で苦しそうな様子を見せたはずである。しかし，この時Kは少しも動揺していない。彼が苦しみ出すのは，先生から「退ぞこうと思えば退ぞけるのか」と聞かれた瞬間である。私の仮説を提示してみよう。

> Kは静への恋に進むことを決断していたが，道を棄てることがどうしてもできなかったため，先生の「批評」の力を借りようとした。先生の「批評」が〈恋に進め〉という力強いものになることが明らかだったので，その言葉の力で恋に進み出せると考えたのだ。しかし，「退ぞこうと思えば退ぞけるのか」という言葉から，先生の「批評」が自分の確信とは違うものになることを予感して苦しみ始める。

あまりに非常識な仮説に唖然としたかもしれない。この仮説は可能性の組み合わせから導き出したものだが，仮説がこの形に収斂した時，私自身がこれはありえないだろうと思った。もしもこの仮説の通りだとしたら，『こころ』という作品のイメージは根底から変わってしまうし，何より，漱石がそこまで読者をミスリードするはずがないと思ったからである。私はこの仮説がどこかで破綻すると信じて仮説に不利な材料を探してみたが，これを否定できる材料はどこからも出てこなかった。それどころか，この仮説は遺書の曖昧で分かりにくい部分を次々とクリアーにしていったのである。『こころ』はこの仮説で読み解ける，私はそう確信している。その根拠をあげてみたい。

Kが仮説のように考えていたと判断する第一の根拠は，「進んで可いか退ぞいて可いか，それに迷うのだ」という選択肢である。この言葉は，恋をめぐる先生とKとの〈論争〉をふまえたものである。この〈論争〉はこの直後に書かれているので，それを引用してみよう。

> 道のためには凡てを犠牲にすべきものだと云うのが彼の第一信条なのですから，摂慾や禁慾は無論，たとい慾を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。Kが自活生活をしている時分に，私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃から御嬢さんを思っていた私は，勢いどうしても彼に反対しなければならかったのです。（四十一）

恋について二人はこれまで正反対の主張をぶつけ合っていた。先生の主張は書かれていないが，「恋そのものでも道の妨害になる」というKの主張に対する反論だから，〈恋は道よりも大事なもの〉といった内容だったに違いない。そして，「御嬢さんを思っていた」先生がKの主張に反発して「勢い」した反論だから，口調はそれなりに強いものだったはずである。「進んで可いか退ぞいて可いか，それに迷うのだ」というKの言葉は，「迷うという意味を聞き糺」されての答えであるが，二人の〈論争〉を確認した上で読み返すと，これが単なる説明でないことが分かる。Kはこれまでの〈論争〉をふまえて，自分の迷いを，〈先生の主張〉を取るべきか，それとも〈Kの主張〉を取るべきかという二者択一に整理してみせたのである。こう問われてしまうと，先生はこれまで自分が主張してきた「進んで可い」という選択肢しか選べなくなる。「迷うという意味」は，これ以外にもいろいろな形で説明できるはずだから，この二者択一が，先生に〈進むべき〉と言わせるための問いであることは明らかである。

Kが〈進むべき〉という特定の答えを誘導したのは，自分の中で〈進むべき〉という結論が既に出ていたからである。そして，結論が出ているにもかかわらずこの「批評」をあえて求めたのは，結論を実行に移すた

めに先生の言葉を必要としていたからだと考えるべきだろう。

さらに，この仮説は「精神的に向上心のない者は，馬鹿だ」というあの言葉が，Kに激しい打撃を与えた理由も明らかにする。

先生が与えた「批評」はKが待ち望んでいたものとは全く違う冷酷なものだった。〈退くべき〉という答えを予感しただけで苦しみ出したKにとって，この答えを実際に聞かされた衝撃は並大抵ではなかっただろう。静との恋に進める唯一の可能性が失われてしまったのである。ただし，この言葉は，これとは別のもう一つの衝撃をKに与えたはずである。そして，もう一つの衝撃は，恋の可能性を失ったショックとは比較にならないほど，強力で恐ろしいものだったと考えられる。

「精神的に向上心のない者は，馬鹿だ」という冷たい言葉は，Kにとってまさに冷や水である。それまで静への恋に有頂天になっていたKは，この言葉で一気に現実に引き戻されたに違いない。そして，恋の夢から現実に戻った時，彼は自分のしてしまったことの重大さに気づき，恐れおののいたのだ。Kにとって，道の追求は人生の唯一の目標であり，それはどんな犠牲を払ってでも追求すべきものだった。しかし，恋に溺れたために，Kは道の追求を棄てる決心をしてしまっていた。自分が道を追求できない人間であることを，自分自身で証明していたのである。冷や水をかけられて目が覚めた時，Kはこの事実に気づいたはずなのだ。確かに，静への恋に一時期目を奪われていたが，それは恋の熱にうなされたがための夢である。道の追求以外に価値を見いだせないという感覚は，彼の精神の深いところから発するものだから，その感覚を忘れることはあっても，変わることはないだろう。

自分が道の追求を放棄してしまった。Kにとってこれはあまりに恐ろしい事実である。〈自分は，人生の唯一の目標に到達することができない。〉Kはこれを知ってしまったのだ。この瞬間，彼から生きる希望が失われたのである。「馬鹿だ」「おれは馬鹿だ」という悲痛なうめき声は，この衝撃に打ちのめされた声だったのである。

ただし，この絶望が直ちに自殺を決意させたわけではない。Kに自殺を決意させたのは，先生の更なる攻撃である。

『もうその話は止めよう』と彼が云いました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私は一寸挨拶ができなかったのです。するとKは，『止めてくれ』と今度は頼むように云い直しました。私はその時彼に向って残酷な答を与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛に食い付くように。

『止めてくれって，僕が云い出した事じゃない，もともと君の方から持ち出した話じゃないか。然し君が止めたければ，止めても可いが，ただ口で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうする積もりなのか』

私がこう云った時，脊の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。（中略）すると彼は卒然『覚悟？』と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に『覚悟，―覚悟ならない事もない』と付け加えました。彼の調子は独言のようでした。又夢の中の言葉のようでした。（四十二）

先生にはKの衝撃が全く分かっていない。それは，たとえば「狼が隙を見て羊の咽喉笛に食い付くように」という比喩から明らかである。この時のKは「隙」を問題にできるような状態ではない。彼は瀕死なのだ。責任をKに転嫁し，「覚悟」という強い語を使った非難は確かに痛烈であるが，今のKを打ち倒すのに，こんな周到な言葉は不要である。Kの耳に先生の非難はほとんど入っていなかったはずだから。「自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました」という描写は，Kの人格がゆっくりと崩壊していく様を感じさせる。先生の非難を一字一句受け止めていたなら，Kの反応はもっとメリハリのあるものになっていたはずである。Kにとって先生の言葉は，遠くから聞こえてくる言葉のように，あるいはＢＧＭのように聞こえていたのではないか。

しかし，ほとんど聞こえていなかったKの耳に，「覚悟」という言葉だけは聞きとれた。『覚悟』に「？」が付いているのは，この言葉の出てきた文脈が，Kに理解できていないからである。恋に進む可能性を否定され，道を追求するという人生の目標も失って，Kは頭が真っ白になっていたに違いない。何も分からず，何も考えられず，何もできない。そんな状態だったKに，この言葉はあることを気づかせてしまう。〈ああ，自分にはまだ「覚悟」が残されていたのか。〉彼が「『覚悟，―覚悟ならない事もない』と付け加え」たのは，おそらくそんな気持ちからである。そして，その「覚悟」が自殺であることは，Kにはもちろん分かっていた。人生に絶望した彼は，死の恐怖にさえ反応することはなくなっている。

Kが自殺未遂をしたのはこの日の深夜である。そのKが先生の裏切りを知っても反応しないことは，むしろ当然だと言うべきだろう。

5　Kの遺書の意味

それでは，Kの遺書にある「もっと早く死ぬべきだのに何故今まで生きていたのだろう」の謎に移ろう。Kの遺書について書かれた本文を引用してみる。

> 手紙の内容は簡単でした。そうして寧ろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから，自殺するというだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が，極あっさりした文句でその後に付け加えてありました。（中略）必要な事はみんな一口ずつ書いてある中に御嬢さんの名前だけは何処にも見えません。私は仕舞まで読んで，すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。然し私の尤も痛切に感じたのは，最後に墨の余りで書き添えたらしく見える，もっと早く死ぬべきだのに何故今まで生きていたのだろうという意味の文句でした。（四十八）

遺書に書かれた文言は一見抽象的で漠然としているが，実は具体的な事実に対応している。「薄志弱行で到底行先の望みがないから，自殺する」が，恋に有頂天になり，道の追求を棄ててしまったことに対応することが分かると思う。ならば，「もっと早く死ぬべきだのに何故今まで生きていたのだろうかという」一見謎めいた文句も，具体的な事実を書いていると考えるべきだろう。これは何を意味しているのか。

既に書いたとおり，あの衝撃を受けた日の晩，Kは自殺を試みている。その晩からKが自殺するまでの日数を計算してみよう。先生の結婚の申し込みは〈自殺未遂〉から「一週間の後」（四十四），Kがそれを知ったのは婚約から「五六日経った後」（四十七），そして，Kの自殺は「奥さんがKに話をしてから二日余り」（四十八）の晩である。合計すると，〈自殺未遂〉から二週間ほどおいて自殺したことになる。自殺を決意していたのに実行をずるずると延ばしてしまったために，Kは静と先生の婚約を知らされる羽目になった。これはその事実を指していると考えるべきだろう。先生は全く気づいていないが，この文句は婚約に対する恨み言なのである。

では，この恨み言は誰に向けられたものだろう。こんなことを書くと，先生に決まっているではないかと失笑を買うかもしれない。確かに，先生に対する恨みが込められていることは否定できないが，このメッセージが意図しているターゲットは先生ではなく，おそらく静である。

話を半日前に戻してみよう。図書館を出てからの二人の遣り取りの場面である。「進んで可いか退ぞいて可いか，それに迷うのだ」これがKの悩みであった。Kは仮に恋に進むことができたとしても，肝心な静に拒絶されてしまえば万事休すである。だから，ここでの「進んで可い」という選択肢には，〈道を棄てられるか〉と〈静が受け入れるか〉という二つのハードルを含んでいなくてはならない。しかし，Kは「退ぞこうと思えば退ぞけるのか」という言葉だけで打ちのめされている。これは二つのうちの始めのハードルだけを問題にした言葉である。Kは二つのうちの第一ハードルだけを問題とし，第二ハードルについては何も考えていなかったのである。〈恋に進むか退くか〉で悩む時，一番思い悩むのは相手の気持ちだろう。実際，先生はこの点をめぐって苦しんでいた。しかし，不思議なことに，Kにはこの点で悩んだ形跡がない。

静が自分の恋を受け入れるか，という問題についてKが全く悩まなかったことについては複数の根拠があげられる。たとえば，Kが先生に静への恋を打ち明ける直前，Kは静と奥さんについてしつこく尋ねている。

> Kは中々奥さんと御嬢さんの話しを已めませんでした。仕舞には私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。（三十六）

仮に，Kが静の気持ちで悩んでいれば，ここで静について突っ込んだ話題を出してきたに違いない。もしそうなったなら，先生はそのことを書き残したはずなのだが，それらしいことは何も書かれていない。Kは自分で静を話題に出しながら，静の気持ちを探るような質問を一切しなかったと考えられる。これは，図書館からの散歩の時も同様である。この時Kの発した「どう思う」という言葉の中に，静の気持ちをどう思うか，という問いは含まれていない。なぜKは静の気持ちを気にしなかったのだろう。彼は，静が自分に恋をしていると信じて疑っていないからである。だから，Kにとって静との恋の問題は，終始自分一人の問題だったのである。

静はKに対して思わせぶりな態度を執拗に取っている。静の思わせぶりな言動をざっと列挙してみよう。まず，彼女は先生の留守を狙うようにしてKの部屋をしばしば訪問する。そして，先生を差し置いてKと二人で外出までしてしまう。Kが静を誘い出したとは考えられないから，これは静から誘ってのデートだったに違いない。さらに，正月のカルタでは露骨にKを贔屓にして先生を嫉妬で狂わせる。また，嫉妬で動揺している先生に，静はしばしば嘲笑するような笑いと言

葉を浴びせている。これらの静の言動が，ウブなKにはどう見えただろう。静が自分に恋していると信じたとしても不思議はなない。Kの気持ちには分からない部分もあるが，自分が静に愛されていると思い込んでいたこと，そして，この思い込みのために恋心が抑えられなかったことは間違いないと思う。

前節で提示した仮説は，次の文言を加えることで完成する。

Kは自分が静に愛されていると確信していたため，自分が恋に進む決断をすれば，静との恋が成就すると信じていた。

Kにとってこの誘惑はあまりに甘美であった。その甘美さが道の追求を棄てさせてしまったのである。

前節で，「精神的に向上心のないものは，馬鹿だ」という残酷な言葉が，道を放棄した愚かさを気づかせたことを確認した。これはKを破壊するのに十分な力を持つ言葉であるが，この言葉も静に愛されているという錯覚までは否定できない。一度は自殺を決意したKが二週間も生きていたのはなぜだろう。彼をこの世に引きつける何かがあったからではないか。その可能性を持つものがあるとすれば，それは，静に愛されているという錯覚をおいて他にないだろう。愛されていると思えば，それが未練となって当然である。この未練が，Kの自殺を遅らせたように私には思える。

しかし，その思い込みが錯覚に過ぎなかったことを，Kは奥さんから突然教えられる。静と先生の婚約である。この事実はKにとってあまりに残酷である。自分が今まで錯覚に踊らされていたことを知ってしまったのだから。恋に有頂天になっていたこと，人生の全てであったはずの道の追及を棄ててしまったこと，その全てが錯覚の結果だと知らされたのだ。あまりに残酷で空しい結末である。同時に，静があれほど思わせぶりな態度を取らなかったら，自分はこれまでどおり道の追求を続けていたはずだ。なぜ，あんな思わせぶりな振る舞いを自分にしたのか，Kは強烈にそれを思ったに違いない。

遺書の中でKは静に対して何も書いていない。彼は書かなかったのではなく，書けなかったのだ。Kと静との社会的な関係を考えれば，静に対して書ける言葉は，当たり前の社交辞令に限られるはずである。具体的には，お礼か，お詫びか，感謝といったものだろう。しかし，Kが静に対して抱いていたのは，これとは全く逆の感情である。彼の気持ちは，怒りや恨みといった当たり前の言葉では表現できないほどの強いものだったに違いない。そんな相手に，お礼，お詫び，感謝などの言葉が書けるはずがない。Kは静にメッセージを書かなかったのではなく，書けなかったのである。

Kは先生と奥さんにはメッセージを残した。しかし，彼が最もメッセージを残したかった相手は，おそらく静だろう。あれほど強い恋心を抱いた相手に，死ぬ前に何か言い残して置きたいと考えるのは自然な気持ちだろう。その気持ちが最後に静へのメッセージを書かせた。「最後に墨の余りで書き添えたらしく見える，もっと早く死ぬべきだのに何故今まで生きていたのだろうという意味の文句」がそれである。この中でKは，自殺を延ばした愚かさをストレートに悔やむのではなく，自殺を遅らせた理由へのこだわりを見せている。静が自分に恋していると信じたことが，自殺を遅らせた原因である可能性の高いことを先ほど書いた。自分が愚かなのではなく，自殺を延ばした原因があったのだ，とKは書いたのである。やはり，この最後の言葉は静に対する強烈なメッセージなのである。

本稿の課題は，Kの自殺の原因，そして，遺書に残された思わせぶりなメッセージの意味であった。Kの自殺の原因から，遺書のメッセージの意味が綺麗に読み解けるたことは，結果として自殺の原因の妥当性を確認することにもなるはずである。

【注】

1）石原千秋『「こころ」大人になれなかった先生』みすず書房　2005年　p.94

『こころ』の本文は新潮文庫（平成９年）によった。